

## 記 念 講 演

---

演 題 「国際化時代の幼児教育」

講 師 国際教養大学学長／国際社会学者 中 嶋 嶺 雄 氏

### 講 演 講 師 の 紹 介



国際社会学者

1936年、長野県松本市生まれ。文学士（東京外国語大学<中国科>、1960年）、国際学修士（東京大学、1965年）、社会学博士（東京大学、1980年）。

1977年、東京外国語大学教授。1995～2001年、東京外国語大学学長。1998～2001年、国立大学協会副会長。現在はアジア太平洋大学交流機構（UMAP）国際事務総長、文部科学省中央教育審議会委員（大学院部会長・外国語専門部会主査）、財団法人大学セミナー・ハウス理事長などを兼務。オーストラリア国立大学、パリ政治学院、カリフォルニア大学サンディエゴ校大学院の客員教授を歴任。平成15年度「正論大賞」受賞。社会法才能教育研究会常務理事、スズキ・メソッド・グランドコンサート大会委員長。文部科学省中央教育研究会議委員、大学院部会長（外国語専門部会主査）。

著書は「現代中国論」「中ソ対立と現代」「北京烈烈」（サントリー学芸賞受賞）「中国の悲劇」「国際関係論」「中国・台湾・香港」「21世紀の大学」など多数。



只今ご紹介いただきました中嶋でございます。私立幼稚園連合の大会が開かれるということで、本日お招きいただきまして大変光栄に存じています。実は今ご紹介いただきましたけれども、今日のテーマは、「国際化時代の幼児教育」ということでして、普段は中国問題であるとか、大学問題の講演をさせていただいている私にとっては、非常に意味ではうれしいテーマをいただきました。

私自身が幼児教育というか、自らの体験を申し上げますと、長野県信州の松本出身でして、大変教育が熱心な所でございます。私自身も幼稚園で3年学びました。赤・黄・紫組の松本市立幼稚園なんですね。この場合は市立で松本市が造った大変古い幼稚園で、もう110年を超えたと思います。今でも幼稚園の時にお世話になった先生、健在な方がございまして、時々お目にかかってはいるんですが、やはり幼稚園時代の思い出というのは本当に自分の原点であるような気がいたします。担任の先生一人一人について色々な思い出がございます。それからまた園長先生がですね、皆さんご存知かと思いますが、一志茂樹先生、大変立派な園長さんでして、歴史家なんですね。後に長野県の郷土史学会の会長とか、長野県の郷土史のリーダーでございました。そういう先生に恵まれて、3年間幼稚園を過ごしました。私は昭和11年、1936年生まれですから、3年間幼稚園に行くというのは当時は町内でも非常に珍しくて、私は一人っ子という事もあったんですけど、町の真ん中の家から通ったものです。そういう意味で幼児教育というのは非常に私にとっても大事だと思っております。そして小学校3年で終戦を迎えまして、

翌年松本にはですね、有名な鈴木鎮一先生が松本音楽院というのを創られたんですね。松本の文化人が木曾に疎開していた鈴木鎮一先生を招いた。日本のバイオリニストはほとんど鈴木先生のお弟子さんが多かったわけです。みなさんご存知の人から言うと、例えば江藤俊哉さんがそうですし、諏訪根自子さんとか、豊田耕児さんとかですね、そうそうたる方々がみんな鈴木先生のお弟子さんでした。それは戦争前のことだったんですけども、終戦直後にまだバイオリンを持ち歩くことさえも白眼視される時代に、松本の文化人が中心になりまして、鈴木先生をお招きして松本音楽院という、木造のいわば2階建ての粗末な所に音楽院を造ったんですね。私はその第1期生です。今でも覚えているんですけども、雪のまだ残っている時に母に連れられて、最初に松本音楽院に行きまして例の「きらきら星」、♪タカタカタッタというのを鈴木先生から手解きを受けたのが最初であります。最初の生徒は大体10人位いました。私以外はみんなプロの道を進みまして、しかし私は始めたのが9歳でしたから幼児教育の適齢期をもう過ぎていましてですね。ですから4歳頃から始めた人達は、みんな音楽の道で大変活躍をされているわけです。

実は夕べ、先程ご紹介いただきました国際教養大学のキャンパスはですね、非常に華やいだ雰囲気がありました。この大学については後で少しご紹介させていただきますけれども、留学生が一昨日から昨日にかけて、世界各国からやってまいりました。サマープログラム、これも今年の4月に開学したわけですから、そこに世界各国から50人も留学生が来るということ自体が大変だったのですが、定員100名の大学ですからバスが着くたびに学生たちが拍手で迎えて非常にエキサイティングな雰囲気でした。アメリカ、モンゴル、台湾、中国、ラオスそれからハンガリーとか遠くからも来てくれまして、そして飛行場の近くにある雄和町のキャンパスは非常に国際色豊かなキャンパスになっております。そこで昨日はですね、国際教養大学ですから教授陣も世界から集めた第一級の人ですので渡辺玲子さんって音楽の好きな方はご

存知だと思うんですけど、15歳で最年少の毎日コンクール、今で言うと全日本コンクールに優勝しまして世界的に活躍している方です。ついこのあいだもサンクトペテルブルクのオーケストラをバックにサントリオホールや札幌でも公演をしました。その渡辺玲子さんが実は音楽芸術論の授業を持ってきてるわけですね。特任助教授として。昨日は少しそれを拡大してコンサート形式の授業を行いました。プラームスのバイオリンソナタとかたくさん弾いていただいてとてもいい夜で、これが国際教養大学だということを実感して私もうれしかったのですが、その渡辺玲子さんもスズキメソッド出身です。昨年ロンティボーコンクールで優勝した山田晃子さんなんかもそうなのですが、そういういわば音楽の道で活躍される天才的な演奏家も育てていると同時に鈴木先生はもともその音楽を通じての幼児教育ですから専門家あるいはプロの音楽家を育てることが目的ではなかったわけですが、やはりその幼児教育を始める年齢としてはですね、これは私がいろいろのスズキメソッドの学術研究会なんかでも責任者として国際的にも色々研究していますと、やはり9歳以前がいいわけですね。9歳を過ぎますと、色々な認知度がついてきますから、自然のうちに覚えるということ以外に、私自身もそうですがバイオリンだけじゃなくて色々な他の活動もする、あるいは中学生のときなんかは陸上競技をやるとか、絵を描くとか、もちろんバイオリンも続けましたけど、色々なことがやりたくなるわけですね。それから勉強もかなりします。現在、アーリー・エデュケーション（早教育）というのは世界的に非常に話題になってまして、つい昨年もドイツのベルリンでこのテーマで国際シンポジウムをやってきました。「子どもと音楽」というシンポジウム。それで、いま才能教育研究会の会長をしている豊田耕児先生と私がテンチルドレン、子供たちを10名引き連れて行って、実際に演奏してみますとほんとにベルリンのような音楽の都の人たちが驚嘆するんですね。スズキメソッドというのはまず、今から、それこそ50周年の大会をやりましたから

40数年前に、東京で演奏した時のテープがアメリカに渡って、そしてアメリカの音楽関係者を始め、大変驚愕させたわけでありまして。スズキの子供たちの演奏を聞いて「音楽は世界を救う」と言って涙を流した。その感動をもたらしたスズキメソッドの50周年の大会がこの3月30日に武道館でありました。私は大会委員長として、天皇皇后両陛下もご臨席下さいまして、ちょっとニュースでも全国的に放送されましたので、あるいはご覧になった方もいらっしゃると思います。

そういう経験からしても、やっぱり幼児期は非常に大事である。これはですね、今私が座長をしております文部科学省の外国語専門教育部会でも議論しております。つまり小学校3年から学習指導要領の中に、総合的学習の時間が設けられまして、そして多くの学校は英語をやり始めたんですね。これも私自身が座長をした、「英語指導方法等の改善に関する懇談会」の答申を受け、いま文部科学省は英語教育のアクションプランを作りまして、そしていよいよ次のステップとして小学校から英語を教科として導入すべきかどうかの議論を今やってる最中です。それとも関係があるんですけど、小学校の3年から英語をやり始めるということには理論的根拠がないんですね。学習指導要領がたまたま3年から総合的な学習の時間を設けたものだから多くの小学校ではそこに英語を入れているというだけであって、本当は幼児教育の理論からすればむしろもっと早くからやったほうがいい、つまり9歳以前がいいんですね。この音楽の教育と実は外国語教育とは相関性があります。私自身も外国語大学の学長もしましたし、自分自身も外国語に苦労したり、あるいはまた自分で外国語の色々なものを毎日のように使っている立場にあるわけですけど、やはりもうちょっと早いほうがいいんですね。そうしますとどうしても幼稚園の段階から、やるならですよ、やるなら幼稚園の段階からきちんとした外国語教育を、しかも強制ではなくて自然に国際感覚を身につけるといような形での教育を導入するのが1番自然なんですね。だから小学校3年からというのはまったく

人為的な区別にしか過ぎないので、そこは私は文科省にはずいぶん強く言っているんです。1年生からだとも1年生は6歳ですからもうちょっと前のほうがいいんですね。ということになるとどうしてもその幼稚園の時に外国語に接する事がいいのかどうかという問題が次にでてくるわけです。これは幼児教育の理論からいえば、最近では脳科学が非常に発達しまして、ベルリンの若い女性の脳科学者がいろいろ実験結果を報告されてきましたが、ほぼまちがいがなく4歳ぐらいからが1番よい。音楽にしても外国語にしてもですね、耳から聞いて覚えるには1番いいんです。ということになるとまさにみなさんのテーマになるわけであり、その場合にまだ色々考えなければいけないことがあるんですけど、どういう方法で、どういう形でやるのがいいかってところが大問題なんですね。安易にこれからは英語の時代だってんで、教育ママをたくさん加熱させて業者が儲かるという、そういうような話になってはいけないわけで、音楽の場合もそうです。どういう理念と哲学を持って幼児教育をやるかということとはきわめて重要です。私自身がそうであったように、幼児教育の影響と言うのはものすごく大きいですから。大学で講義を受けた時の内容なんてあまり覚えてなくても、幼稚園の先生に言われた一言一言というのはものすごくその人の人格形成に影響を与えますよね。そういう意味ではこれからの日本の教育にとって1番大事なものは幼児教育。これは私がここに来たから申し上げるわけではなくて、私はいつもそう思っています。

それからもう一つは高等教育。たまたま中教審で私は大学院部会長ですけれども、日本の大学教育あるいは大学院教育をどうするかは大変重要な問題で、今までのように大学をレジャーランドみたいに考えたり、大学でほとんど勉強しない、そういうような高等教育をやっていると日本はこのまま落ち込んでしまいます。特に大学院はそうですね。ですから、そういうことで新しい大学をこの秋田に、寺田知事はじめみなさんのご要望に応じて今開学したばかりなんですけれども、高等教

育の重要性については私自身がそれを体験して今実験しているわけで、おかげさまで1番うれしいことはですね、TOEFL、日本人が外国に留学する時に、特にアメリカに留学する時にものさしになるテストですね。これはもう世界的に定評があるわけですから、私どもの大学はTOEFLを全面的に導入しております。そして4月8日に開学記念式典がありまして、入学式と兼ねて私は英語で、全ての授業は英語で行われますから、会議も英語でやられるような大学ですので、英語で訓辞をしまして、東北にも関係の深い新渡戸稲造について、新渡戸稲造の武士道をですね、英文で書かれている武士道をみんなの共通の図書にしようと、諸君の中から21世紀の新渡戸が出る事を期待するという訓辞を開学に当たっていたしたわけですから、これもやっぱり全部外国語教育に関連してくるわけですね。

新渡戸稲造は実は11歳、ちょっと過ぎてましたけど11歳で東京外国語学校に入ります。東京外国語学校、今の東京外国語大学の前身の東京外国語学校は非常に古い学校で、明治6年、明治4年から日本の教育は文部省ができて、近代教育がスタートするわけですけど、その直後ですから、そこに南部藩の藩士の子弟であった新渡戸稲造は11歳で入ってくるわけです。岡倉天心が横浜の貿易商の息子で、岡倉天心も11歳で入ってきます。当時は年齢制限なんてなかったんですね、外国語学校は。それでもう一人内村鑑三もクラスにいます。それらの人たちはみんな英語で英語を習っているわけです。ちょうど今の我々の国際教養大学がそうであるように、その時の教育でもって英語の基礎ができますね。ちょっと遅かったんですけど。しかしだから彼らは、天心も外語でぶらぶらしてましたが、新渡戸稲造の場合には札幌農学校にクラーク先生が来て、そちらに移っていきます。新渡戸稲造と言いますと、「Boys, be ambitious」のクラーク先生と一緒に印象深いですけど、その前なんですね。それらの人たちはみんな後に、『武士道』もそうですし、まず英語で書かれるわけです。明治の時代、南部藩の青森県か

ら行った11歳の少年がですね、そこで勉強してやがて『武士道』を書くようになるのです。今のよう  
に英語なんか勉強しようとするばいくらでも、  
TVひねったって、CNNでもなんでも聞かれると  
いう環境にありながら、今の大学生は大学卒業  
して『武士道』のような立派な本を英語で書ける  
でしょうか。岡倉天心だって『茶の本』を書きま  
したが、あれも英語です。そういうことを今の日  
本の教育はやっているでしょうか。全く英語の指  
導方法も間違っていますし、日本の教育が間違っ  
ていますね。その間違っただけは、言ってみれば  
能力に応じた教育というものを放棄してしまった。  
ですからわれわれの国際教養大学はTOEFLでも  
ってクラス別編成をしました。EAP1・2・3、E  
nglish for academic Purposes、つまり口先  
だけでペラペラ英語ができる、Heyとかそんなこ  
とをいくら言っても本当の英語教育ではありません  
から、ちゃんと中身のある、自分の意見を表明  
できるような英語。そのために1年間の留学が義  
務ですから、アメリカの大学へ行ってもすぐに授  
業についていけるような英語教育をやってるわけ  
ですね。そういう英語教育をやってるわけですけ  
ども、TOEFLの結果によって全部クラス別編成  
をしました。EAP1・2・3、3が一番点数の高  
い人達。そうすると1に行った人たちは、落ち込  
んじゃってるかということ、そうではないですね。  
自分は田舎の学校に行っていて、ほとんど外国人  
に会ってない、教科書で勉強しているだけだから。  
TOEFLというのはいろいろ聞く力だとか、書く  
力だとか総合的に試みますから、しかもコンピ  
ュータでやるわけですから、試験でとまどってで  
きななかったが、この次は頑張るよと言って、ある  
いは自分にはこのぐらいの程度の方のクラスで勉  
強の方がスタートとしてはいいんだと。みんな  
それで満足してくれて、そして、7、5週後に、つ  
い最近2回目のテストをやりました。そうしたら、  
それが私のうれしいことなんですけれど、すごく  
伸びてるんですね。TOEFLの絶対スコアで  
47、2ポイント上昇しましてですね、平均点が500  
点近くになってます。大体日本の大学でアメリカ

の大学へ留学する時、アメリカの大学が留学を許  
可する時、550ぐらいですから、もううちの学生  
は、1年生で2ヶ月と少しやっただけで500点。  
もうトップのほうは600点越えてるわけですね。  
そういうことをやっているわけですけど、それは  
EAP1の人を人格的に差別しているかという  
全くそうじゃないわけですね。ところが日本の教  
育は多くの大学で先生がシェークスピアの専門家  
ならシェークスピアに関心のある人もない人もた  
だ英語の授業を1年間やって終わりでしょ。それ  
で単位を与えてるでしょ。その人が会話もできる  
かどうかもわからないで、卒業させているわけ  
ですから。そういう総合的な結果がですね、今日、  
英語教育においてはまったくアジアに比べても落  
ち込んでしまいました。国際会議に行ってもしゃ  
べれる人が少ないんです。ほんのわずかしかない  
。そこで高等教育が大事だということを今しっ  
かりやって国際社会に活躍する人材をつくろうと  
思ってるんですけども、非常にその伸びがいいん  
で、大変うれしい結果であります。そして、やは  
り高等教育とともに必要なのはまさに幼児教育だ  
ろうと思います。

それですね、もうちょっと外国語との関連を  
お話しますとね、最近の脳科学による実験結果で  
もそうなんですけど、もう一つは人間の体験なん  
でしょうね。歴史的体験が幼児教育の重要性を教  
えています。もっとかみ砕いてお話しますと、明  
治6年に東京外国語学校が出来た時に、英語の先  
生を、お雇い外国人を呼んできました。当時の外  
国語学校はものすごい人気だったそうです。岩波  
文庫に『回想の明治維新』という本が出てまして、  
メチーニコフというロシア人が書いてます。この  
人もお雇い外国人で、彼はロシア語を教えていま  
した。彼の記録によるとですね、とにかくこれか  
らは明治維新が終わって英語の時代だっというの  
で、文明開化だっというので東京外国語学校の英  
語科に、さっきのように岡倉天心とか新渡戸稲造  
とか内村鑑三とか柔道で有名になった加納治五郎  
とかみんな入ってくるわけです。その時の先生、  
英語のほうはお雇い外国人ですが、漢語学科、つ

まり中国語はですね、長崎の唐通事を連れてきた人ですよ。唐通事ってわかりますか。唐の都の唐、そして通訳、事に通ずるですね。長崎に行ったことのある方は中華街に崇福寺というお寺があります。長崎で1番大きな中国寺ですね。観光でも有名なところです。崇福寺の門前に石碑がありまして、頼川重寛を称える石碑なんですね。ちょっと難しい字ですけど、この頼川重寛というのは日本名なんです。福建省からきた中国人で、葉家なんですね。葉家は唐通事を代々世襲にしているわけです。歌舞伎の役者みたいに。世襲にする時に通事ってというのは通訳ですよ、今でいう日中通訳、あるいは中日通訳。それを覚えさせるためにですね、9歳までに教育しなければいけないって書いてあるんですよ。まさに今、4歳から9歳までになって言った事と、9歳過ぎると認知度がついて、関心が他にいっちゃうわけだから。それを言ってますね。ですからつまり、能力別の教育とか、幼児教育、早教育というのはいかに大事であるか。それをやることはなにかエリートを作ることとか、教育の平等に反することとかではないのです。日本国憲法にも国民は能力に応じて教育を受ける権利があると書いてあるのです。教育基本法にも書いてありますよ。教育基本法にも書いたにもかかわらず、教育基本法を守れ、改正は反対だと言う人たちが平等主義の教育ばかりやって教育基本法に違反しているわけです。おかしいんですね。英語みたいに明らかに生徒の能力が違う場合は進んだ人は進んだ人で、クラスを作ってそこで徹底的に教育していいわけですね。遅れた人は一生懸命やれば追いつくという、そういう教育を放棄したところに日本の教育の大きな間違いがあるんじゃないかと、私は最近つくづく思っているわけです。さてそこでですね、幼児教育の重要性は先程、知事さんのご挨拶にも色々ありましたけど、文科省もかなり認めつつあります。これからはむしろみなさんが大いに活躍していただく時代です。

去年の3月に私共もかなり時間をかけて、中央教育審議会の答申を出しました。その答申は「新

しい時代にふさわしい教育基本法と教育振興基本計画」。みなさんもお読みになっていると思います。これがまた今政局がらみで若干伸びちゃっているんですけど、非常に困ったことですね。その点はきちんと政治家にやってもらわないといつまでもこんな生煮えの状況で日本の教育の根本が定まらないのは非常に良くない。やがてこの問題もかなりはつきりしてくると思いますけども、その中にですね、幼児教育、それからさっきの音楽を含めた感性教育、情操教育の重要性を初めて正式に書き込んでありますから、皆さんお帰りになったら是非読んでください。特に感性教育、情操教育というのはどこがやるんでしょうか。まず幼稚園ですよ。これは非常に重要だと思います。それは早い時期にやらなければいけない。認知度がつく前にやる必要があるんですね。認知度がつく前にやる時にそれじゃあどういうやり方がいいのか。スズキメソッドについてはご承知の方もいらっしゃると思いますが、私自身が自分の体験を含めてお話しますとですね、そこにどういう問題があるかについても人一倍知ってるつもりですのでお話しますが、鈴木鎮一先生は才能は生まれつきのものではないという一種の哲学、鈴木鎮一先生はバイオリニストというよりも教育者として有名だと言ってもいいし、そこに鈴木先生の1番の評価すべき点があったと思います。したがってどういう環境で育てるか、やっぱり豊かないい音楽を子供のうちから聞かせることが非常に大事だという事を強調されました。そしてどの子も育つんですね。誰でも、渡辺玲子さんのようにはなるわけにはいかないですけど、私ぐらいにはなるわけです。私は明日留学生を迎えた歓迎会でバイオリンを弾いてほしいということで、渡辺玲子さんの弾いた後に私が弾くことになっているんですけど。ビバルディやモーツァルトぐらいのところまでは誰でも弾けますね。どんな環境の子でもいい教え方をすればそこまでいくんです。だけどその後プロになるかどうかというのは次の選択の問題でね、広くみんながいい音楽を親しむ、あるいは私のように忙しければ忙しいほどわずかな時間

をバイオリンを弾くことによってストレスが解消できるとか、生活の糧、人生の糧になるわけですから。そこでスズキメソッドの場合には「教育五訓」というものを定めました。「より早い時期、より良い環境、より多い訓練、より優れた指導者、より正しい指導法」このような条件設定はやはり必要でして、そしてこの場合非常に重要なのは、より良い指導者ですね。先生方が非常に重要だということでもあります。

松本郊外の浅間温泉の本郷小学校を実験校にしまして、全面的にスズキメソッドを取り入れたことがあります。しかし、県の教育委員会、文部省の反対で押しつぶされてしまったんです。

スズキメソッドの良いところは、国からの援助を全く受けていないんです。民間の団体なんです。ここにスズキメソッドの運動の良さがあるんですね。

鈴木先生が亡くなったとき、NYタイムズやワシントンポストも一面で翌日報じました。あんなに大きく報じてくれたということは、日本の民間教育運動に非常に理解が深かったんですね。

ところがあれほど日米親善につくした鈴木先生が、民間人だったために、国から一切の報償を受けなかったんですよ。文化勲章にもならなかったんです。民間の運動に対して、官というものがいかに冷たいかということが分かりましたね。でも、「だからこそ鈴木先生の足跡が残るんだ」と、亡くなったときに私は言いました。国がもてはやして、いわば国営の芸術家にはならない方が良かったと思います。別の出来事があって、ノーベル賞はのがしてしまいましたけれど、ノーベル賞平和賞の最後のところまでノミネートされていたわけで、99歳で亡くなりました。

そうすると、今後英語教育をどうするかということが大きなテーマになりまして、私自身もまだ結論は出ていません。小学校から英語をやるなんてとんでもない、そろばんや読み書きが大事だという意見もありますよ。

私が座長をやった、日本の「英語教育指導方法

改善」の答申は、2つの座標軸を設けることで解決したんです。

① 一つは、国際的に活躍する人材の英語力をいかに強化するかです。これは本当に必要であって、秋田県からは明石康さんのような人が出ていますでしょう。明石さんのような人が本当に少ないんです。国際的な舞台では、会合はほとんど全て英語であります。コミュニケーションができればいいが、いかにそのような人材が少ないか、という状況です。シンガポールのASEMというアジアヨーロッパ連合の教育会議がありましたが、日本の出席者は一番多いのですが、誰も発言しないんですよ。それはやはり、英語力が弱いからなんです。ですから、きちんと自己主張できるような人材を生むことが一つであります。

② 日本国民が、これからインターネット時代、英語がどんどん入ってこざるを得ない状況になってきているから、そのときに一方では、日本人としてのアイデンティティを持つことが大切なんです。自分のところのアイデンティティをしっかり持つことで、当然相手に対しても、相手の文化も尊重できるようになるわけで、そういう心を育てることは、日本国民全体にとって必要なことであり、国民全体の英語力ももっと高めなければならない。

こうした2つの座標軸を設けたことで、英語をどのように教えるかというときの議論がうまく収斂しました。そして結論的には、日本のこれまでの英語教育は間違っているということになりました。

その問題をとらえて秋田の国際教養大学は一つの実験をやっているんです。そうすると次のテーマとして、幼稚園から英語をやる幼稚園が人気が出るなどといったことが出てくるでしょう。否定すべきことではないんですが、しかし、スズキがヤマハと違うのは、駅の前にヤマハがあり、音楽はヤマハのほうが手取り早いんですが、だけどスズキは手作りの民間運動なんです。まさに私学、私立の幼稚園連合である、そこに一つの哲学を持

った教育が授けられるということは、単なる公立だけの幼稚園ではない幼児教育にとって非常に大事だと思います。同じように英語教育をやる場合に幼稚園での英語教育を実験的にどうやるのか。今後やる場所が出てきてもいいと思います。それがこれからの国際化時代に備える幼児教育として、非常に個性があるということになるのではないのでしょうか。

しかし、注意すべき留意点として、お母さんたちが単なる早くから英語をやれば、大学受験に有利ではないか、スターになれるのではないか、などの目的ではなくて、子どものうちから外国語を覚えるということ、勉強するということの意味、それは非常に大きな意味があるんですが、そのこ

とをしっかり理解していただきたいと思います。自分と違った人間たちの集団の言葉を、少しでも自分もやってみることで、本当の国際理解ができ、本当に世界が広がってくる。少しでもやったらそれを使うこと、使ったら次のステップが必ず開けてくること。分からない言葉があったら、どんなに疲れていてもすぐ辞書を開いて調べること。そのような訓練をすること。そういう積み重ねを大切にすると、本当にできるようになるんですね。一つ一つ世界を広げていくことの喜びも味わうことができます。頭の老化を防ぐために、音楽と語学は非常に良いんです。皆さんには外国語の勉強も是非やって欲しいと思います。

講演会記録者
--------

栗 森 勢津子 (将軍野) ・ 中 村 由美子 (将軍野)
-------------------------------

平成16年度

第12回東北地区私立幼稚園設置者・園長研修会  
秋田大会集録

---

期 日：平成16年6月18日(金)

会 場：秋田ビューホテル 秋田市中通2-6-1 TEL.018-832-1111

主 催：全日本私立幼稚園連合会東北地区会

後 援：秋 田 県 秋田県教育委員会

秋 田 市 秋田市教育委員会

秋田県国公立幼稚園協会

秋田県私立幼稚園PTA連合会

実 施：秋田県私立幼稚園連合会

